そんな中で無力感を感じてしまったり、特に、Ａくんともそうですがいろいろな子供たちとかかわっていく中で、仲良くなれた、信頼関係を築けたと思った途端にすっと足元をすくわれる。やはりそこでは「思い上がるなよ。まだおまえを信用していないぞ」という子供たちの警戒だったりもしますし、自分が援助者として怠ってしまうというか、思い込みで行動してしまうことが失敗につながったり。そんな中で、子供たちの傷の根深さに改めて、「本当に、私たちには太刀打ちができないぐらいに根深いのだ」と腰が引けてしまうときもありました。

自分ができることとは

そんなときに一番力になったのはチームワークで、スタッフみんなで話し合いを重ねたり、役割分担をしたり、情報交換をすることが役立ちました。もう一つは、自分の心の健康を保つために、休みを取ることも仕事のうちの一つなのだと考えるようになり、引き出しを増やすためにいろいろ外に出ていって、別の世界の友達と話す経験とか、家族やおじいちゃんおばあちゃん、自分が居心地がいいと感じる所にまた立ち返ってパワーをもらったり、エネルギーをもらうというバランスの取り方もしました。

だんだん、ただ単に疲れて無力感を感じて、「もう駄目だ」と思っていた段階から変わっていったのは、「もしかしたら、今自分が向き合っているこの子のために自分が何かしてあげられることは、本当はないのではないか」と思うようになりました。「もししてあげられることがあったとしてもごくわずかだ。だったら、ほんのちょっとでも力になれたら幸いだなというつもりでやってみよう」と思い直すようになった途端に、肩の力がすごく抜けました。そしてクライアント自身の力、この子供たちが自分の力で自分の傷を癒したり、自分が今まで抱えてきた未解決の問題も、その傷や未解決のものを抱えながらでも、それでもこの世の中を生きていこうと思えるだけの力をどうやったら養えるのかという視点になりました。

そして同時に、自分自身も子供と向き合う中で、自分から引き出される怒りとかどうしようもないもどかしい思いというのは、自分が今まで生きていく中で未解決だった問題にけっこう端を発していることがある。「そうか、そういうところがあったな」と、「自分自身も人間として成長発達していく一過程の人間なのだ」と思えるようになってきました。そんな中で、私たちはきっと、ソーシャルワーカーとしてやるとしたら、法律の行間を埋めながら利用者に寄り添っていくことなのだと思います。

つい先日も、卒園してからもう何年もたった20代後半の卒園生がいるのですが、その人が夜逃げをしてしまい、「アパートが6カ月間放置され家賃も滞納されている、何とかしてほしい」という連絡を受けて、私たちはそこの家を片付けに行きました。ゴキブリやガの卵がすごいぐらいになっていてごみだらけの家でしたが、そこを片付けて帰ってきました。

もしかしたらここまでやる施設はないかもしれないし、「これは私たちの仕事ではない」と言ってしまえばそれまでです。でも、やはり法律の網の目からも漏れてしまうようなニーズがたくさんあって、子供やその家族の援助に取り組んでいくのはそういうことなのだという思いで考えを切り替えて、幅広い視点で援助していくことに力を入れています。

おわりに～

人が人とつながっていく力を持つということはどういうことか

最後にまとめとして、私がぜひ皆さんに共

有していただきたい思いは、「人が人とつながっていく力を持つというのはどういうことなのか」ということです。人が人とつながっていく力は本当に大切な力なのではないか、それこそが生きる力の原点なのではないかと思っています。私たちは、友人でも家族でもコミュニティーのだれかでも、人とつながっていく力を持ってこそ、初めて社会で生かされるし生きることができるのだと私は感じています。

この生きづらい世の中で、傷つき体験を持たない人なんかだれもいません。私たちもそうですし、この会場の皆さんもそうなのです。だけれども、その傷つき体験を繰り返して、それでもなお生きていかなければならないとして、そんな中でだれかとの出会いとか、つながりによって救われたり癒されたり。そういうところでよりどころを持てる。

もし、自分が生まれたときの家族がとてもよりどころにはできないような家族だったとしても、そのあとに出会った、学校の先生でもいいし隣のおばちゃんでもいいし、私たち施設の職員でもいい、そういうだれかがよりどころになれたり、力になれたりというところで、救われたり癒されたりする機会があります。でも、その機会をものにできるかどうかは、つながる力がなければ駄目です。

私たちは、もしそんな機会やそんな人との出会いがあっても、そこに対して自分から尻込みをしてしまったり心を閉ざしっぱなしであっては、せっかくのチャンスもつながることができず、自分の力にはなってくれないまま終わっていってしまう。いつまでも自分の人生を自分のものにできないというテーマが、子供たちを見ていてすごく感じられます。やはり、ありのままの自分を認められて信じてもらう体験を私たちはみんな必要としていて、それがなければ自信を持つこともできないし、人を信じることもできず、そして人を信じることもできなければ、人とつながっていくことができないというところを私は子供たちを見ていて感じます。

だから、子供ながらに「社会の宝だ」と自分も感じていた、その「子供は社会の宝だ」という原点に立ち返って子供たちを「希望」というふうに考えてこそ、彼らが人生の途上でいろいろな、さまざまな場面で出会う人とか、そういう人とつながっていく力を持てるようにいかに援助していくかというところ、援助していかれるのかというところを私たちは常に考えながら仕事をしていかなければと思う今日このごろです。ご清聴ありがとうございました。

―― どうもありがとうございました。

これからコメンテーターということで渡部先生に報告者３人の方と語り合っていただきたいと思います。

■渡部氏

実は、ここで私は「コメンテーターとの質疑応答及びコメント」と書かれてありまして、お三方にお昼前にちょっとお会いした時に、共通で聞かせていただきたいことがあると三つのことを申し上げました。

それは何かというと、多くのソーシャルワーカーの人たちが、「自分たちのソーシャルワーク実践を高めていくために何か頑張りたいと思っているけれども、そのための時間がない。なかなか時間が取れない。記録を書いたり事例検討会に出たりという時間がない」。もう一つは、「スーパーバイザーが見つからない」ということを課題として抱えていらっしゃいます。そういうことを皆さんは経験していらっしゃるか。そして、それに対して何かやっていらっしゃることがあるか。この一つ目、二つ目の二つのこと。

それから三つ目の問いかけとして、それぞ

れ違った領域、鍋谷さんは医療のソーシャルワーク、小山さんは社協のワーカー、濱中さんは施設で子供と関わっていらっしゃる。それぞれ少しずつ、少しずつといってもかなり違うのですが、そういうところでその個別性、固有性が故に、自分が何か頑張って学ばなければいけないこと、若しくは、そこでちょっと大変だと思っていらっしゃることに対して、どんなことをしているかをお話ししていただければということをお願いしております。

ただ、今お三方がかなりきれいにまとめてくださいまして、お話の中に入ってきている部分もあると思います。時間のことを考えて、ちょっとこんなふうに変えたいと思います。

私が、今お三方が話してくださったことの中から見つかる共通点を5分ほど要約をさせていただいて、そして、すみません、3、4分になると思うのですが、そのあとまたお一人ずつ、今の質問も含めて、今日は「ソーシャルワーク実践における私の取り組み」ということでしたので、皆さんに何かお伝えできること、補足したいことを話していただきます。そこの中に先程の質問を含めてくださるというのでよろしいですか。

三者の報告の要約

今おさん方の話を聞いて私が思ったのは、非常にソーシャルワークらしいシンポジウムの話になった。何かといいますと、ソーシャルワークの実践とは何かというときの広がりが、まさに今見えたと思います。

鍋谷さんの場合には、医療ソーシャルワーカー。非常にミクロ。私たちがソーシャルワーク実践と言うときに、どちらかというとこのミクロの、1対1若しくは1対家族、せいぜいグループという実践を思い浮かべますが、この話でした。そして鍋谷さんの職場でのお仕事というのが、またこれは固有性なのですが、重症患者さんを受け入れていくという固有性を持った職場でした。

一方、小山さんは、もしこの権利擁護のことがなければ、ちょっとご自分でも疑問を投げかけてくださったのですが、一般的にはソーシャルワークの中でメゾと言われる、ミクロ、メゾ、マクロと広がっていくのですが、管理的プログラムを作ったり、組織としてある制度を動かしていったりすることが中心になるような社協。市町村の場合にはもうちょっと違いますが、特に都道府県なんかのときにはこちらが多くなります。その中で働いていらっしゃいながら、今、今度は権利擁護が入ってきて、もっと対クライアントの仕事に入ってこられた。

濱中さんの場合には、施設でのソーシャルワーク実践。そこで、これらがみんな違ってくる。濱中さんの施設でのソーシャルワーク実践はミクロなのですが、この中に教育的な要素がとてもたくさん入ってきます。それから養育的な要素が入ってきます。

そういうことで、それぞれお三方が、同じソーシャルワークという名前なのですが、異なった目的であるとか、若しくは異なった広がり方を要求されていらっしゃる。ここで、いったい何が共通項になるのかということを考えていくと共に、逆に、ここで出てくる課題、ソーシャルワーク実践の広がりはどこまでと私たちは考えればいいのか。もう一つ。ソーシャルワーカーはどこまでクライアントの心理的な課題に踏み込んでいかなければならないのか。

私は昔、ソーシャルワークという名前はまだあまり使われていなくて、ケースワーク、カウンセリング、心理療法の違いという3段階の本を読んだことがあります。心理療法は深いところまで入っていく。ケースワークは浅い部分しか、心理的な側面は扱わないのだと切り取られていました。

しかし、今おさん方の話を聞いていると、どうもそんなに簡単な切り分けができない。

特に濱中さんの場合には、対象者、利用者の子供さんたちの、かなり深い、かなり初期の心理・社会的な発達の側面にまでソーシャルワーカーが理解を示すことができ、かつ、そこにまで入り込んでいけなければ、本当の意味での信頼関係が築けないということが分かったと思います。

まとめと言いながらも、逆に私は課題をちょっと言っています。ただ、この中で共通項として出てきたのが、まずお三方とも、いかにして信頼を勝ち得て・・・。申し訳ないです、勝ち得てと言うとあまり良くないかも分かりません。いかにしてクライアントの人が私に何かの相談を持ってきてくれたり、若しくは「一緒にかかわっていける存在として私を見てください」とクライアントの人に言えるのか、言ってもらえるところまでどうすれば行かれるのか。

２番目です。今度は向こうが、「じゃ、それならば濱中さん、ここまで一緒に付いてきて」と子供さんがやってきたとする。すると、その言ってきた、要求してきてくれたこと、ニーズの内容に、どの深さまで、どんなかたちでこたえ得るのか。これら、ソーシャルワークが今までずっと抱えてきた、ソーシャルワークの広がりとソーシャルワークのゴールの設定の深さ。どこまでかかわっているかということを、すべて今の皆さんのお話で出されたような気がします。

ここで私が皆さんに質問させていただいて、皆さんからお話を聞かせていただく前に、一つ思い出したことがあるので話させていただきます。

小山さんが最初に思い出させてくださったのですが、実はソーシャルワークには社会的使命があります。私たちの仕事は、目的と共に社会的使命があります。日本ではあまり強調されないのですが、アメリカでソーシャルワークを習った時には、「ソーシャルワークには社会を改善するという使命がある」と私は習いました。

つまりそこに出てくることは、現在システムが十分に機能していなくて、それ故に困難に陥っている人たちが少しでも機能しやすいように、私たちは１対１、１対何とかの仕事もするけれども、その中で制度が変わっていってくれるように働き掛けるのも私たちの仕事である。

ところが、これはとても大変な役割になります。そこでもう一つその使命を考えると、私たちのソーシャルワーカーとしての役割やソーシャルワーカーが働いている機関が持つ限界を理解することもとても大事ですが、限界にぶつかったときに、「じゃ、その先、どこまで今目指せるか」ということを考えていかなければいけない。その努力をどこまでできるか。これをおさん方のそれぞれ異なる領域でも課題として出していただいた気がします。

クライアントの経験を見聞きしながら、共感すると共に、お三方とも、どこかでは無力感を感じるときもあるということも聞かせていただいたと思います。鍋谷さんの場合には重症患者の方で、その方たちを受け入れる病院。そこで在宅に戻れる方もいれば、戻れない方もいらっしゃる。小山さんの場合、権利擁護事業が対象とする人たちが抱える課題の広さ。弁護士でなければやっていかれない、ここには警察が要るのか、何々が要るのかという広がり。濱中さんの場合、私たちが子供さんにどこまで入っていかれるのか。１対１でかかわりたいけれども、１対10しかできないではないか。この辺のことがたくさん出てきました。

皆さんがそれぞれ何らかのかたちで、自分たちで努力してくださっています。鍋谷さんは新しい資格を取って、ケアマネジメントという新しい分野で、自分の知識や経験を広げていらっしゃる。それから異職種の人たちからのアドバイスを得ることで、ご自分を広げていらっしゃっている。小山さんは、権利擁

護という分野での活躍を通して、今までの社協職員以上の新たな領域に出ていらっしゃっている。そして自主勉強会というかたちで、ご自分たちが外にスーパービジョンを求めていっていらっしゃる。

濱中さんの場合には、今度は自分たちの仕事のゴールをしっかりと考えて、ご自分を広げる一つのキーワードというのは、「私たちの仕事では危機回避が中心なのではなく、子供たちのバックグラウンドの理解、そして発達段階に必要なかかわりの展開まで持っていこうではないか」ということ。それから、その中でも燃え尽きそうになる自分たちを、チームワークで何とか支えていこう。個別には、休息、世界を広げるというかたちで、ソーシャルワーク実践への取り組みをしてくださっているということが、渡部が今聞かせていただいたまとめです。

ここに十分に入っていなかったこともたくさんあると思います。時間の制限ですべてを言ってはいただけないのですが、皆さんがどんなふうにこれ以上のこと、時間がない、スーパーバイザーがいないということや、特別な領域が持つ課題に対してどんなことをしていらっしゃるか、若しくは皆さんに何かお伝えになりたいことを、すみません、本当に3分か4分なので、時間が来たら私が「ブー」と言わせていただきますが、お願いできますでしょうか。

順番は、逆に行きましょうか。では、こちらから行きましょう。びっくりしたでしょう？濱中さんから行っちゃいます。さっき鍋谷さんが最初だったので、ちょっと驚きで濱中さんから。すみませんが、3分たったら「3分です」と言ってしまいます。

■濱中氏

ずれてるかもしれないのですけれども、最近考えているのは人材バンク作りというか、やはり施設の中だけではとても限られてしまって、私たちも視野が狭くなってしまうし、能力にも限りが出てしまうので、いろいろな分野に子供たちの養育に力を貸してくれる、サポートしてくれ得る人材を確保していく。ふるさとの実家のほうに住んでいる肝っ玉母さんでもいいですし、ボランティアで来ていた大学生の彼女に家庭教師のようなかたちで子供たちにかかわってもらうとか、そんな中からまたつながりを見つけていくとか。

人を育てるという仕事をしているのですが、またその援助者である人を育てるための自分なりの取り組みという意味では、後輩の職員とのスーパービジョンもそうだし事例検討もそうだし、常にその日あったことを振り返り、日々何でもない時間なのですけれども、「こんな場面でこんなふうにしました。この子はこんなふうになりました。私はこんな気持ちになりました」というのをお互いに話す時間を持つとか。ピアスーパービジョンでしょうか、そういうものも意識して持つようにしています。

あとは、自分たちの仕事の内容を知ってもらうための努力。先程の話にもありましたが、学校の先生や幼稚園の先生、中学の先生、高校の先生、いろいろな人たちに理解を求めて、自分たちの仕事内容を知ってもらうという機会を持つようにもしています。

■渡部氏

せかしてしまったので随分短くまとめてくださいました。言葉にしてしまうと、まず資源開拓ですね。自分のしたい仕事をより良くしていくための資源作りということで、資源開発。

それから仕事内容理解も、やはり外堀を固めていくということで、1人でやるのではなく周りからもっと理解してもらって、ソーシャルワーカーだけではなくて、周囲の人たちの理解の中で自分の仕事を、ある意味、簡単に言うと、少しでも楽にできる、より有効に

自分を使っていってもらうための努力。

■濱中氏

子供たちも楽になると思います。

■渡部氏

子供たちに楽にもなってもらうために、ソーシャルワーカーだけでは不十分なところを、ほかの人たちにも一緒にやっていただきたい。ありがとうございました。では、小山さん。

■小山氏

では、今の話につながるようなところで、資源作りとかネットワークの視点、あるいはそのメゾとミクロの実践のところを巡ってなのですけれども、私たち社会福祉協議会は地域の中で権利擁護事業というかたちで個別の方を支援しているわけですけれども、今までにいわゆるネットワークというか、いろいろな関係の団体とつながってきて、いろいろな人たちがその人を支援する中で、私たちも支援をしているわけです

ただ、非常に金銭管理ができないというような、自分の金銭管理などというのはとても人には言えないデリケートな部分です。社会福祉協議会はいわゆる小地域ネットとか見守りみたいなかたちで、地域の方たちで支え合っていこうという部分も大切にしながら、地域福祉の仕事を進めているのですけれども、そういった一人の方を支えるときの、特に金銭でのデリケートな部分、特に、中には地域の方が実は財産侵害をしていたり、あるいは家族の方が財産侵害という事例もあるわけで、一概にただネットをつなげはいいとか、資源を利用すればいいというのではないだろうというスタンスがとても大事だろうし、そこのところで配慮していくことが必要だと思います。

それからもう一つネットの点で言うと、いろいろな機関と連携すると言いましたが、例えば生活保護のケースなどの支援などをしていくときに、生活保護のケースワーカーの方がやる業務と、私たち権利擁護事業のやる業務が微妙なところでシンクロするときがあった場合、変な話、ケースワーカーの方が持っているケースの量が多い中で、言葉は悪いですけれども、丸投げのようなかたちで来てしまったり、あるいは押し付け合いや安請け合いのようなかたちで来てしまいがちなところもあります。

そういったときに、さっき制度の外でも支援しなければいけないというところも話しましたけれども、逆に権利擁護事業という制度があるからこそ、自分たちの事業がどこまでできるのか、あるいは自分たちの事業を進めている社会福祉協議会という組織がどこまでできるのかというところをきちんと自覚的になってこの事業に取り組んでいくという視点は、とても大切なのではないかと思います。

それから三つ目に、先生が心理的側面の話をしたのですけれども、私はちょっとそういうところまでは考えられなくて、またちょっと違う視点で言うと、ソーシャルワークのことを自分で思いをはせるときに、私はいつも人生相談のことを考えます。新聞なんかの人生相談を読むのが好きなのですけれども、ソーシャルワークというのは、かなり人生相談の反対の方向というか・・・。

人生相談というのはある意味で、みのもんたのような人を含め、自分の考えを押し付けるみたいなところがあって、なおかつそれで相手に足払いを掛けてしまうところがあるのですけれども、多分ソーシャルワークはそうではないと思うのです。その人と立ち向かうというよりは、本当に寄り添ってどういう支援をしていくかが大切なのだということを、いつもこの事業にかかわりながら考えているところです。ちょっとまとまってないですけれども。

■渡部氏

ありがとうございました。では、鍋谷さん、お待たせ致しました。

■鍋谷氏

私は、今実際に、周りに自分一人しかソーシャルワーカーがいないということで、病院の中で相談するということができないので、ほかの病院のワーカーさんに聞くとか、ソーシャルワーカー協会の勉強会に出る時間を今なるべく作るようにしたり、最近はケアマネジャー業務も始めたということで、今私がいる部屋には看護婦の経験があるケアマネジャーの方がいるので、その方と日ごろ何気ない会話で分からないこととか困ったことを相談したりしています。

地域医療連携室という部署を作ったので、県内の病院でもいろいろ、「地域連携室」と名前はあるけれどもどう活動したらいいか分からないという部分が多くて、先月からですけれども、そういう連携室がある病院がみんな集まって勉強会を開こうと。みんなで集まれば、講師の方をお呼びしていろいろな情報を交換できるのではないかということで、最近そういう勉強会も一つ始めました。

あとは、病院という中で福祉職は自分一人ということもあって、なかなか付いていけない部分もあるのですけれども、なるべくほかの職員の方、看護師さんや先生とコミニュケーションを取るようにして、分からないことは率直に聞いて、教えてもらえる関係を作るように努めています。何とまとめていいのか分からないのですけれども。

渡部　ありがとうございました。今、鍋谷さんが言ってくださった中で、一つ。皆さんが難しいと思ってなかなかできない、講師の人というかスーパーバイザーを呼ぶというのも、一人一人が１人のスーパーバイザーを求めていたらとてもたくさん必要なので難しいのですが、今おっしゃったように、勉強会とか何かで集団になって皆さんが一生懸命ラブコールをなさると、来てくださる可能性がすごく高くなると思います。

■　渡部氏

―全体のまとめ

本当はお三方にはもっとお話をしていただきたかったし、さっきは私は「みんなでディスカッションしようね」とかいい格好を言いながら、すみません、ディスカッションできるような時間が残りませんでした。今はまとめに入っています。ただ、お三方のそれぞれのお話を聞きながら、非常に貴重な体験を本当に深めてしゃべってくださったので、私も聞きながらいっぱいノートを取って、昔考えていたようなことをたくさん思い出させていただきました。メッセージ性のとてもたくさんあるそれぞれの発表だったので、この中から学んでいただいたことがたくさんあると思います。

最後に総まとめとして、私の「ソーシャルワーク実践の核心は何か？そしてその獲得の課題は？」に戻りながらソーシャル実践を考えていくと、やはり皆さんが言われた中で、「基礎に戻っていく」。関係性の形成であるとか、役割の認識・限界であるとか、チームワークとか、他職種との連携、同じことを言いましたが、これはすべて基礎に戻っていく。

そして、基礎に戻って、今度は良い相談援助の仕事をしようとすれば、ここは今ちょっと触れることができなかったのですが、皆さんが実践の中で試行錯誤、いろいろなことをして、それこそスーパービジョンを受けてみたり、勉強会をしてみたり、それからご自分が経験していることをこんなにきれいに話してくださるというのは、経験をしっかりと自分の体の中にもう１回戻していらっしゃるからだと思います。このような姿勢がとても大事だということが分かりました。

皆さんがおっしゃる、「時間がない」「スーパーバイザーがいない」というのは、恐らく事実ではありますが、ここに今日、こんなに忙しい中、土曜日のお休みに、こうやって研修に来てくださった方がこれだけいらっしゃるというのは、皆さんが一生懸命自分を育てていきたいと求め続けていらっしゃるからだと思います。もし講師の方をお呼びになるときにも、そのような姿勢は必ず相手の方を打つと思います。ぜひ、ないとあきらめないで求め続けていただきたい。

先程小山さんがモットーを言ってくださったので私も言うのですが、「ソーシャルワーク・社会福祉は、しぶとく、しつこく、あきらめず」というのが渡部のモットーです。私たちは、しぶとく、しつこく、みんなが忘れたころに「ねえ、これはどうなった？」とあきらめずにやっていくこと。これだと思っています。

最後にもう一つ。私がアメリカにいる時に先生に教えていただいた良いソーシャルワーカーの条件ですが、「ウォームハートとクールヘッド」。心は温かい。でも、温かさだけで仕事をすると、周りの人を不幸にすることがあります。やはりここでクールヘッド。知的にそして温かく、この二つを最後に皆さんにお伝えします。

「エンパワーする」という言葉が今はやっていますが、クライアントの方がエンパワーされたと感じていただけるためには、私たちソーシャルワーク実践をする人間もエンパワーされていなければなりません。そのためにはやはりあきらめないで、限界を見ながらも、どうやってその限界から少しでも進んでいかれるかを見ることが大事なのではないかと、また再確認させていただきました。

お三方、そして時間が延びたにもかかわらず、強制したにもかかわらず、最後まで残ってくださった皆さん、本当にありがとうございました。これで終わらせていただきます。

（拍手）

－　ありがとうございました。本当はもっとお聞きしたいことがいろいろとあるかと思いますが、時間もありますので、これで第２部のシンポジウムを終わらせていただきます。

３人の報告者の方、それからコメンテーターの渡部先生にもう一度拍手で感謝をささげたいと思います。どうもありがとうございました。

（終了）

社会福祉専門職国家資格化後におけるソーシャルワーク実践事例の
収集・評価による実践方法の標準化に関する研究(平成16年度)

平成~~16~~17年3月発行
発　行　日本社会事業大学 社会事業研究所
主任研究者　手島陸久
〒 204 − 8555　東京都清瀬市竹丘 3-1-30
TEL　0424-96-3050　　FAX　0424-96-3051